川越市立博物館

博物館だより

第43号

疱瘡絵（鍾馗）

赤絵の菓子袋

疱瘡絵

疱瘡とは伝染病の天然痘のことで、古くは奈良時代にその流行が記録されています。以後日本では明治に至るまで、頻繁に発生しています。疱瘡流行の間隔は、時代が下るに従って次第に縮まり、江戸時代には全国各地で毎年発生、流行するようになりました。疱瘡は伝染力が強いため、免疫力の弱い子どもでは特にかかりやすく、死亡率も高いものでした。そのため疱瘡は、麻疹（はしか）とともに、子どもの病気ではたいへん恐れられました。江戸時代の文書の中には、子どもが疱瘡にかかったときの「疱瘡見舞受納帳」や「疱瘡菓子貰控帳」などがしばしば見受けられます。

疱瘡絵は、疱瘡にかかることを防ぎ、また感染したとしても軽くすむようにと作られた赤摺の版画です。赤色が使われたのは、赤（紅、朱）が魔除け、災難除けに効力のある色と広く信じられていたからです。そのため達磨や子どもの玩具などにも赤色が多く用いられました。疱瘡絵の図柄は、赤という色彩から連想する達磨や鯛車・金太郎など、守護神としての鍾馗や源為朝、それに病が「軽い」をイメージする羽子板や春駒など、多彩なものが取り上げられています。

図版左の疱瘡絵は鍾馗を描いています。鍾馗は、中国唐代の玄宗皇帝の夢に現れて邪鬼を祓い、病を治したという故事から、疫病などを追い払い、魔を除ける神として知られています。また図版右は菓子袋の赤絵です。右上に熨斗が添えられ、富士・源為朝・達磨・鍾馗が描かれています。疱瘡などの病気見舞いには「軽い」という言葉の連想から、「軽焼き」という甘辛い煎餅菓子がよく用いられました。

刀工　藤枝英義とその時代

1．刀工 藤枝英義を追って

幕末は、日本が大きく揺れ動いた時代です。

外には開国を求めて来航する外国船の脅威、内には将軍家の後継をめぐる内政の混乱がありました。こうした社会の不安を反映して、各藩は武備を増強し、多くの刀工を召し抱えました。

川越藩では天保年間(1830～44)に上野国の刀工玉鱗子英一を鉄砲鍛冶の名目で召し抱えます。英義はその英一の子として、文政6年(1823)、上野国那波郡川井村(現群馬県佐波郡玉村町)に生まれました。父に鍛刀の技を学び当代の名工細川正義の門に入った後、「当今江戸無類の上手也」と賞されるほどになります。

当館では、平成16年3月27日から5月5日まで、「刀工藤枝英義とその時代」と題した展覧会を開催しました。その準備の中でいつも私の頭の片隅にあったのは、英義とはどんな人だったのだろう、幕末という激動の時代を刀工としてどのように生きたのだろう、という疑問です。

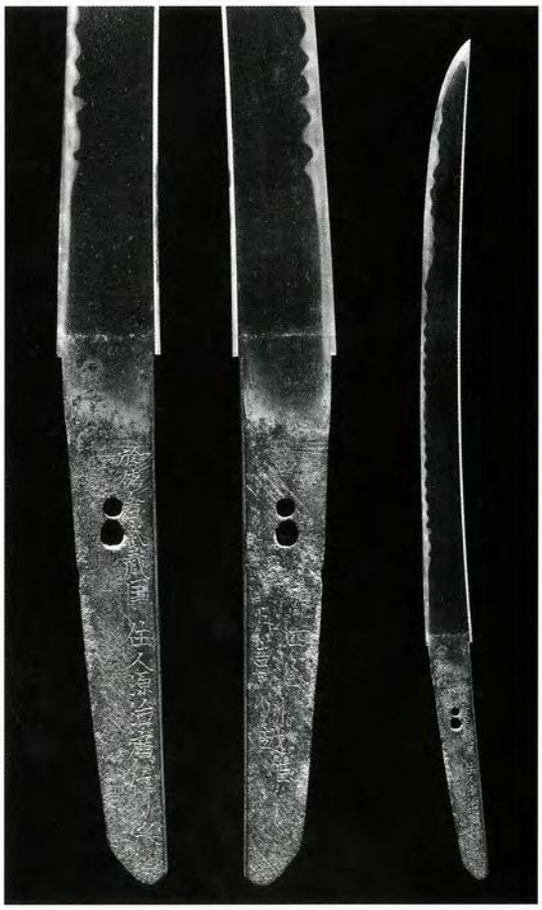
本稿では、英義の作刀を3期に分けて紹介し、その足跡をたどります。また、当時の川越藩政と英義がどのように関わっていたのかという問題についてもあわせて考えてみたいと思います。

2．作刀から足跡をたどる

《前期　弘化4年～嘉永4年(1847～51)》

1の平造の脇指は弘化4年(1847)の年紀をもつ英義最初期の作刀です。刃長41.6cm。先反り強く、切先のふくら枯れた鋭い姿。異鉄を混ぜて肌を強く出した地金に沸出来の互の目刃を焼きます。中心の仕立ては英一とよく似ており、英義の初銘である「治廣」の文字が刻まれています。本刀は南北朝時代の相州上工の作を念頭に作られたと思われますが、技術がまだ追いついていません。しかし、その後の大成を予感させる若々しく覇気に溢れた一振です。

この作刀の後、英義は細川正義に入門し、遅くとも嘉永2年(1849)には皆伝を受けます。そして、父英一の「英」と師正義の「義」を継いで「英義」と銘を切るようになります。皆伝後の英義の作風は以前のものと大きく異なります。例えば、「脇指　武蔵国英義／河肥臣亀岡信治依好嘉永三年八月日作之」は1と同じく相州伝の作風ながら、地刃の構成が洗練され、中心の仕立も細川正義に似たものに変化しています。



1 脇指　於佐倉武蔵国住人源治廣作之
弘化四年二月吉日　川越臣

2 薙刀　武 テルヨシ

《中期　嘉永４年～慶応２年(1851～66)》

嘉永４年、英一が死去すると、英義がその家督を継ぎます。そして、嘉永６年11月には藩より鉄砲鍛冶から刀鍛冶に家業替えを命じられました。これにより、英義は正式に川越藩お抱えの刀鍛冶となります。

この家業替えには当時の川越藩の政治動向が深く関係していました。川越藩が江戸湾防備のため品川沖に新設された御台場の警備を幕府から命じられたのが実は嘉永６年11月なのです。川越藩は御台場警備に必要な刀剣を製作させるため英義に家業替えを命じた可能性が高いと思われます。群馬県佐波郡玉村町にある英義の墓に「因承公命鍛錬長巻刀薙刀各二百振賞賜若干」とあるのはこれに当たるのでしょう。

２はこの時作られた200振の薙刀のひとつと考えられます。刃長44.6cm。反りの浅いすらりとした姿。板目肌が杢を交えて肌立った地金に、沸づいた互の目刃がリズミカルに並びます。中心には「武　テルヨシ」と太々と切られています。これと同様のカタカナ銘の薙刀は他にも数振あり、中には番号が刻まれたものもあります。

安政３年(1856)、おそらく英義は藩の御用をやり遂げ、一息ついたのでしょう。弟子の正木英辰に皆伝を許しています。その後ようやく、自らの理想を追って刀を鍛え始めたようです。

３はこうした時期の作刀と考えられます。刃長71.2cm。身巾広く反りの深い堂々とした姿。小板目肌の約んだ地金に細川正義に似た丁子刃を焼いています。本刀はその出来の良さとともに中心に切られた銘が注目されます。これによれば、この刀は寺本雅脩の求めに応じて安政５年、江戸霊南坂(現東京都港区赤坂一丁目）の川越藩邸で作られたことがわかります。また、山田源蔵(吉豊)による截断銘は「刀　藤枝英義(花押)／万延元年於千住太々土壇払山田源蔵」などこの時期の他の作刀にも見られます。これは、英義自身が刀の切味を示すため、山田源蔵に試し切りを依頼したものと考えられます。

４は文久３年(1863)の作刀です。刃長73.4cm。反りの浅いこの時代に特長的な姿。精良な地金に沸づいた湾れ刃を焼き、非常に豪快です。中心には３枚の桜の花弁が刻印されています。この桜花紋の刻印は文久元年から元治元年(1864)までの英義の作刀に見られます。この刻印のある刀は、俗に佐倉打といわれていますが、本刀の注文主である小川敬之が佐倉藩士であることからも(『佐倉ゆかりの刀剣展』 佐倉新町資料館　平成４年)、その可能性は高いでしょう。当時、佐倉は堀田家の城下町として栄え、細川正義の次男忠義ほか細川一門が槌音を響かせていました。英義はここを訪ねたものと思われます。

元治元年３月、水戸藩の尊攘派天狗党が蜂起し、川越藩はその鎮圧に当たります。この時、英義はすでに佐倉から戻ってきていたようです。

３刀　本藩鍛工藤枝英義於武州江戸霊南邸作
安政五年戊午八月吉日　応寺本雅脩需　安政六未年
十一月廿三日於千住太々土壇払山田源蔵切

４刀（桜花紋）応小川敬之好藤枝太郎英義作之
文久三癸亥年八月吉日　目方二百三十目ノタレ好通

5は元治2年の年紀をもつ平造の脇指です。刃長39.0cm。身巾広く、先反り強くつきます。地金は小板目約んで地沸つき、刃文は沸出来の互の目刃です。中心には大和守家の替紋である巴紋が刻印されています。この巴紋は、元治元年から明治2年(1869)までの6年間の作刀に見られます。天狗党の乱の直後から使われはじめることから、何らかの御用をつとめた恩賞として藩主から使用を許されたものと考えられます。

《後期　慶応2年～明治6年(1866～73)》

慶応2年(1866)、松平大和守家が前橋に移りました。明治2年の版籍奉還、つづく4年の廃藩置県で藩がなくなると、英義は郷里にほど近い上野国那波郡飯倉村の慈恩寺に移り住みます。

6は明治6年の英義最晩年の作刀です。刃長37.1cm。身巾狭く反りの深い姿。小板目肌の約んだ地金に得意の丁子刃を焼いています。銘は太刀銘に切ります。本刀は下之宮火雷神社の宮司和田義弓の求めによって鍛えられたものです。当初、英義は長寸の奉納太刀を鍛えようと考えたことでしょう。しかし、寺に隠居の身、小さな火床(ほど)しか設けられず、この長さになってしまったものと思われます。本刀は長さは短いものの奉納太刀にふさわしい見事な出来ばえです。

明治9年3月、廃刀令が布告されると多くの刀工が職を失い、廃業・転業を余儀なくされます。英義は病を得、同年5月24日、失意のうちに54歳の生涯を閉じます。

3．英義の生涯

このように、これまで美術品として個別に鑑賞されてきた英義の作刀を集め、全体を見渡してみると、刀工としての英義の足跡がおぼろげながら浮かびあがってきました。

父英一、師正義に学び、後に飛躍するための力を蓄えた前期、川越藩工として御用をつとめ、存分に腕を振るった中期、松平大和守家とともに前橋に移り、明治維新によって郷里に戻る波乱に富んだ後期。

英義の活動は、予想以上に幕末の川越藩の政治的な動向と軌を一にしています。川越藩はこの国難の時代に臨んで、藤枝英義という刀工の実力を評価し、最大限に活躍させたのでしょう。その見返りとして英義は川越藩お抱えの刀鍛冶として取り立てられ、巴紋の使用を許されたものと考えられます。

川越初雁刀剣会の調査によれば、英義の弟子正木英辰は後年、孫に「師英義は非常に大柄な人だった。」と語ったそうです(『第22回埼玉県名刀展』 埼玉県刀剣保存協議会 昭和53年)。私の頭の中で英義がその大きな身体を揺すって生き生きと歩き始めるには、その人柄や家族、弟子たちとの関係などわからないことがまだまだたくさんあります。英義の足跡をたどる旅は続きます。

(学芸係　岡田賢治)

5 脇指 (巴紋) 藤枝英義作
元治二丑年二月日

6 脇指 応和田□之霤藤枝英義作之
従一位火雷天神剪刀 明治六酉年八月吉日

本丸御殿で聴く雅の調べ

平成16年８月５日、本丸御殿の広間に、琴の調べが流れました。これは「夏休み子ども体験」の一環で、子どもたちが和楽器の琴に直接触れながら、「さくらさくら」の合奏をしたものです。当日は約50人の子どもたちが指導者のもと、真剣に琴と向きあいました。最初は、おそるおそる小さな音を出していた子もいましたが、弦を爪弾くことで広間に響く雅やかな音色の魅力に惹かれ、次第に大きな音が出せるようになりました。やがて、弦の弾き方の要領を得て、最後の合奏になると、一緒に参加した大人たちよりも堂々と、しかも正確に一音一音を奏でていました。

本丸御殿の広間は、琴の音色を味わうには格好の場所だったようで、音色に誘われて来館される方もたくさんいらっしゃいました。普段は、静けさと落着きが持ち味の本丸御殿に新たな魅力を垣間見た気がします。

南大塚の餅つき踊り

当館では、毎年11月３日（文化の日）川越に伝わる民俗芸能の実演を関係者の協力を得て開催しています。今年は県指定無形民俗文化財「南大塚の餅つき踊り」を実演しました。当日は晴天に恵まれ、歌にあわせて、リズミカルに餅をつく楽しい踊りと、振る舞われたつきたての餅の美味しさに多くの参加者が感激していました。

南大塚の餅つき踊りは、毎年１月の成人式の日に、市内南大塚の西福寺、菅原神社で行われます。

大釜で蒸し上げたモチ米を臼にいれ、はじめに６人でナラシ（モチ米をならす）をし、ネリ（やれ押せ、それ押せと練る）、ツブシ（きたこら　どっこいしょ）をした後に、本格的に餅をつきだします。マタクグラセなどの曲芸を入れて3人でつく三テコと、6人でつく六テコがあり、西福寺から菅原神社まで臼に綱を掛け曳きずりながらつきます。そのため別名をヒキズリモチともいいます。

（平成16年9月19日に行われた古谷本郷の獅子舞）

古谷本郷の獅子舞

川越市東部の古谷本郷地区では、毎年４月の弁天様の春祈祷と、９月の古尾谷八幡神社の例祭（敬老の日の前日）に獅子舞が行われています。

起源は定かではありませんが、獅子舞の道具を納める長持に、弘化５年（1848）の銘があることから江戸時代から行われていたものと推測できます。その後、中断しましたが、昭和50年（1975）に古谷本郷上組の「昭和力会」により復活し、現在に至っています。

この獅子舞は、獅子頭を一人でかぶって舞う「一人立ちの獅子」の形態で、三人が一組となる「三匹獅子」といわれるものです。獅子頭は大獅子（雄）女獅子（雌）・中獅子（雄）の三頭です。大獅子は黒塗りで、頭上に宝珠をのせ、角はねじり角です。女獅子は朱塗りで、頭上に金色の小さな角がついています。中獅子は、大獅子と形状は同じで、角は棒角です。

９月の古尾谷八幡神社の例祭はほろ祭とよばれ、大勢の見物客でにぎわいます。この日、獅子舞は古尾谷八幡神社に奉納されます。獅子舞の一行は、正午過ぎに集会所を出発し、古尾谷八幡神社に向かいます。行列は、弓張提灯を先頭に高張提灯、花笠、天狗、獅子、その後ろには万灯、ほら貝、笛吹きが続きます。神社に着く直前のお旅所で地元の青年団による出迎えを受けます。神社にお参りしてから、境内の庭で、獅子舞を舞います。曲目は「入は」「岩崩し」「岡崎」などがあり、曲に合わせて獅子が軽快に舞います。

現在では勤め人が増え、忙しい中での練習や、若い世代への獅子舞の継承など、続けていくには多くの課題があるそうです。しかし、地区に残る獅子舞を次の代へと受け継ぎ、これからも古谷本郷の地で演じ続けていただきたいと思います。

常設展示室から

板　碑

板碑は板石塔婆とも青石塔婆ともよばれ、死者をとむらうため、または自身の死後の安楽を願って、鎌倉時代から室町時代にかけてさかんに造られました。秩父地方や小川地方特産の緑泥片岩を素材とした板碑は、旧武蔵国を中心とした関東地方に広く分布していることから、特に「武蔵型板碑」とよばれています。

板碑の構成は、頂部、塔身部、基部に大別されます。頂部は山形に造られ、その下に二条線が刻まれ、中心である塔身部には主尊や銘文などが刻まれています。基部は板碑を立てるために地中に埋められる部分です。

板碑の主尊は多くの場合種子が用いられます。種子は、古代インドの梵字を借りて特定の仏・菩薩を表したもので、阿弥陀如来を表すキリークがよく見受けられます。このほか、文字そのもので名号（仏・菩薩の名）・題目を表して主尊とする場合もあります。

阿弥陀如来（キリーク・正体）

川越市内における板碑は、岸町にある宝治２年（1248）銘の阿弥陀三尊種子板碑が現存する最古のものです。その後徐々に造立数は増え、1300年代が最盛期であったと推測されます。その後はしだいに減少傾向となり、1560年代以降市内の板碑は途絶えています。

文献の少ない中世の社会・文化を知る上で、板碑は当時の情報を今日まで伝える貴重な資料です。展示室の一角にたたずむ板碑を前にすれば、きっとみなさんは中世の信仰世界へといざなわれることでしょう。

嘉暦2年（1327）銘阿弥陀一尊板碑（複製）

Information

平成17年3月までの予定です。

講　座・教　室　etc.

行　事	日　程	申し込み
●博物館歴史講座 「考古学からみる川越の歴史　古墳時代」	2月13日(日)　2月20日(日) 2月27日(日)	2月1日(火) 午前9時～
●子ども博物館教室 「昔の織物に挑戦」	3月5日(土)　3月6日(日)	2月26日(土) 午前9時～
●博物館歴史講座 「近代化へのあゆみ　城下町」	3月10日(木)　3月17日(木) 3月24日(木)	3月1日(火) 午前9時～
●野外博物館教室 「川越城を探る」	3月20日(日)	3月2日(水) 午前9時～

※変更の場合もあります。申し込み方法も含め、詳細については、「広報川越」を御覧ください。
お問い合わせは、博物館まで。

土　曜　体験教室

各月2回、土曜日に開催しています。
博物館に遊びに来てください。

- 会場　川越市立博物館
- 時間　午前10時～11時30分と
　　午後1時30分～3時30分

平成16年	12/18	万華鏡を作ろう (12/3より申し込み受付)		
平成17年	1/8	まゆ玉を作ろう (1/4より申し込み受付)	1/22	たこを作ろう
	2/12	昔の単位ではかってみよう	2/26	おひなさまを作ろう (2/12より申し込み受付)
	3/12	昔のおもちゃを作ろう	3/19	博物館フォトラリー

※1/22、2/12、3/12、3/19は、当日直接博物館へお越しください。
※詳細は当館にお問い合わせください。

ご　紹　介

〈博物館受付でお求めいただけます〉

第23回企画展　刀工　藤枝英義とその時代
A4判　84頁　一五〇〇円

川越藩のお抱え刀工、藤枝英義。彼の作刀を通じて、幕末という激動の時代に迫ります。

第22回企画展　川越の算額と和算家
A4判　80頁　七〇〇円

市内の算額5面と和算家の家に残されている和算書や測量器具を中心に紹介しています。

第19回企画展　中世びとの祈りII　―板碑のある風景―
A4判　72頁　七〇〇円

中世びとの「生きた証」である板碑。そこに込められた「祈り」の意味について考えます。

第15回ミニ展

むかしの勉強・むかしの遊び

平成17年1月20日(木)～3月6日(日)

特別展示室の展観

小学校３年生の社会科学習にあわせた展示です。地域の人々の暮らしの移り変わりを生活道具・遊び道具などからたどります。

昭和30年代から40年代を中心に、当時の教室・居間・台所や駄菓子屋の店先を再現し、教科書や文房具、家電製品、ブリキのおもちゃなどを展示します。この展示をとおして、大人の方々がお子さんたちに、当時の思い出を語れるような場を作っていきたいと思います。

皆様の御来館をお待ちしています。

第25回企画展「民間信仰のかたち－講－」(仮題)

会期：平成17年3月26日(土)～5月8日(日)

民間信仰は、人々の社会生活などを通して、暮らしの中に深く根をおろしたものです。「講」は信仰上の目的をもって組織された集団ですが、次第に慰安や娯楽の機会ともなり、人々の生活に深く結びついてきました。この企画展では地域にある様々な「講」を紹介する予定です。

利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館(観覧)券			
				博物館美術館	博物館本丸御殿蔵造り資料館	博物館・本丸御殿蔵造り資料館美術館	博物館・本丸御殿蔵造り資料館・美術館川越まつり会館
一般	200円(160円)	100円(80円)	100円(80円)	300円	300円	450円	800円
大学生高校生	100円(80円)	50円(40円)	50円(40円)	150円	150円	220円	600円

※(　)内料金は、団体〔20名以上、１名につき〕の場合

◆開館時間　午前９時から午後５時まで（ただし入館は４時30分まで）

◆休館日　月曜日（休日の場合は翌日の火曜日）
第４金曜日（休日・休翌日を除く）年末年始（12月28日～１月４日）
特別整理期間（12月中旬予定）

＊開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも同様
（特別整理期間は、博物館のみ休館）

交通案内

東武東上線・JR川越線　川越駅より
または西武新宿線　本川越駅より
東武バス「札の辻」下車徒歩８分
・御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。

発行日　平成16年12月15日　発行　川越市立博物館
〒350-0053 川越市郭町２丁目30番地１　☎049-222-5399　FAX 049-222-5396
Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp
http://www6.ocn.ne.jp/~kawahaku/

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています